

全身に鉛でもつけてるみたいに、体が重い。

エナジードリンクの飲み過ぎだろうか。ずっと頭がガンガンして、割れそうだ。

無理やり足を引きずって、のろのろと駅までの道を歩く。早くしないと終電に間に合わないのに、体が言うことを聞いてくれない。

（疲れたなあ……）

新卒でIT系企業に勤めて三年。

もうずっとこんな調子だ。

無茶ぶりばかりのクライアント。それにNOと言えない営業と上層部。破綻しているスケジュール。どんどん辞めていく先輩や同僚。

人手不足が極まっているのに、欠員の補充もろくにされない。

自然と残った人間が穴を埋めることになる。

もう二ヶ月ほどろくに休んでいない。

毎日早出と残業で、家に帰ったら気絶するように眠ってしまう。

とつきの昔に心は死んでいて、何も感じない。

ただ、眠りにつくとき——このまま朝が来なければいいのに、と願ってしまう。

ふと、目の前にひっそりと佇むお店の明かりが目に入った。

【ティーショップ・シリル】という看板が掲げられている。お茶の専門店か何かだろうか？

（こんな遅くまでやってるなんて、珍しいな）

今度入ってみようかな、なんて考えていると。

（あ……やばいかも）

ずん、と一氣に身体が重くなつた。

頭がくらつとして、うまく歩けない。足がもつれる。

そのままバランスを崩して、地面に倒れ込んでしまった。

（どうしよう、起き上がれない……）

身体に力が入らない。指先が冷たい。寒い。

そのうち、どんどん視界がぼやけてきた。

（私……死ぬのかな……）

でも、その方がいいのかも。

だって、朝なんてもう迎えたくない。

このまま、ずっと眠っていたい。

そしたら、楽になれるから――

(……あれ?)

どこからともなく、良い香りがする。

甘い、花のような――

それに、とても温かい。

(もしかして、ここって天国……?)

うつすらと目を開けると、丸眼鏡をかけた、チャイナ服みたいな衣装を着た男の人が私の顔をのぞき込んでいた。

薄いベージュ色のふわふわの長い髪の毛をひとつにまとめている。

顔は私より小さいんじゃないだろうか。

毛穴ひとつみつからないような滑らかなミルク色の肌。

紫がかった、アメジストのようなキラキラと輝く瞳。すつと通った

鼻筋。艶のある薄い唇は、口紅でもつけているのかというくらいに鮮やかな桃色に色づいている。

芸能人でもこんな整った顔立ちの人はいないのではないだろうか。もはや人間離れしている。

（うわあ、すごきれいな人……）

「良かった……！ 目が覚めたんですね」

「……ここ、は……？」

「あなたは私の店の前で倒れていたんですね。このまま起きなかったらどうしようかとハラハラしました」

「……そうだったんですね。すみません。あの、もう大丈夫ですか
ら」

と、起き上がろうとしたのだけれど、また頭がくらつとしてへたり

込んでしまう。

「無理しないでください。見たところ、かなり体調が悪そうだ。良かったらここで休んでいてください」

「でも、終電が……」

「もう夜中ですよ。朝までここにいてから、家に帰ってはいかがです？」

明日も早出なのに、そんな悠長なことは言っていられない。

一瞬タクシーで帰ろうかと思っただけ、なんだかそこまでするのがバカバカしくなってきた。

「……じゃあお言葉に甘えて、お世話になります」

「ぜひ、そうしてください。今、お茶を持ってきますね」

男の人はそう言うと、部屋を出て行った。

（お店の人に、助けてもらっちゃった……迷惑かけちゃったなあ）

どうやらここは、お店のプライベートルームのようだ。私が寝かされているソファ―ベッドとノートパソコンが置かれている小さな机ひとつしかない。

ただ、どこからともなく、ずっとほの甘い香りが漂ってくる。

「お待たせしました」

ほどなくして、男の人がトレイにカップを載せて戻ってきた。

どうやら甘い香りは、このお茶のものだったようだ。

「熱いので気をつけてくださいね」

「ありがとうございます。えっと……」

「シ ril、と呼んでください」

「……はい、シ rilさん」

カップを受け取り、口をつける。紅茶に似たまろやかな甘みが、口いつばいに広がった。

シリルさんは隣に座り、お茶を飲んでいる私の様子を伺っている。

「いかがですか？ お口に合うといいのですが」

「美味しい、です」

「良かった」

シリルさんは柔らかく微笑んだ。

「これは甜茶といって、中国のお茶なんです。むくみやめまいに効くそうですよ」

「そうなんですね……」

「顔がずいぶんとむくんでいたもので、差し出がましいようですがこちらをご用意させていただきました」

「……………」

カップの中でゆらめく飴色の液体を、じっと見つめる。

そこに映る私の顔は、ばんばんにむくんで、目の下には青黒いくまが出来ていて。まるでお化けみたいだ。

「……はは……ひどい顔………」

自分の顔を見ているうちに、ぼろぼろと目尻から涙がこぼれおちた。

「……つく……つく………」

まるで堰を切ったように、涙が溢れてとまらない。別に悲しくもな
んともないのに。

「ごめん……なさい……つく、わ……たし……なんで……こんな……
つ………」

目元を手の甲で拭っている私の肩に手を置き、シリルさんが優しく

語りかける。

「今まで溜め込んでいたものが、溢れてきてしまったんですね。好き
なだけ、泣くといい」

「……うつ、あつ、あああああ……っ」

嗚咽は号泣へと代わり、私は子供みたいに声をあげて泣きだしてし
まう。

止めたいのに止まらなくて。

わんわんと泣き続ける私を、シリルさんがぎゅつと抱きしめてくれ
た。

「よしよし、よしよし」

まるであやすみたいに、とんとん、と背中を優しく叩いてくれる。

甘い薔薇のような香りが、鼻腔をくすぐる。

彼が付けている香水だろうか？ 嗅いでいるとほっとして、凍てついていた心がゆつくりと溶けていく気がする。

すつぽりと彼に包まれると、温かくて、安心して。

ますます泣けてきて、私は彼にしがみついてしゃくりあげ続けた。

「……落ち着きましたか？」

「はい……すみません……。あの……服、濡らしちゃってすみません。クリーニング代払いますから」

「気にしないでください。すぐ乾きますから」

シリルさんは私の涙でぐつしより濡れた胸元をぱたぱたと手で仰ぎ、につこりと笑った。

「泣いてすっきりしたようですね。顔がさつきまでと全然違う」

「あはは……そうかも。もう死んじやつてもいいかな、なんて考えてたし」

冗談めかして言うのと、シリルさんがすつと真顔になる。

「死んでもいいくらい辛いことが……あつたんですか？」

「……会社がブラックってやつで、この二ヶ月くらい全然休んでなくて。でも、そんなのよくある話だし、私が弱いだけなんですよね」

「……それは……倒れて当然ですよ。あなたは頑張りすぎだ」

シリルさんが両手でぎゅつ、と私の手を握った。

「あなたの心と身体は、限界に達している。このままだと本当に——命が危ない」

シリルさんの顔は真剣で、心から私を心配してくれているのが痛い

ほど分かった。

「お、大袈裟ですよ。私、全然元気ですし……」

「自覚がないだけです。お願いですから、もつと自分を労ってください。それが無理なら……私に、少しでも癒させてください」

シリルさんが私に覆い被さるようにして抱き寄せる。

ふわり、と甜茶の香りと共に、薔薇のような甘い香りがまたもや鼻をくすぐる。

（この香り、好きだな……癒される……）

なんだか頭がぼうつとしてきて、ふわふわして。何にも、考えられない。

香りにうつとりしていると、顎を指先で捉えられる。

シリルさんの顔が近付き、柔らかい唇がそつと私の口に触れた。

「ん……ちゅ……っ……♡」

れろり、と私の唇を舐め、僅かに開いた唇から舌を差し入れる。

（うそ……♡口の中っ、ぐちゅぐちゅされてっ♡すっごく気持ちいい……♡）

シリルさんの舌は自在に私の口腔内を舐め回し、舌の裏まで潜り込んで付け根をつんつん♡と愛撫する。

（なんだか……シリルさんの唇、甘くて美味しい……♡）

流し込まれる唾液はシロップのように甘く。砂糖菓子を舐めているような気分。

もっともっと、欲しくなって。

気がつけば自分から彼の唇を貪っていた。

ちゅ……♡ちゅぷ……♡じゅるう♡

舌を絡ませ、シリルさんの赤い舌から滴る蜜を一滴も残すまいと啜りあげる。

「ふふ……私の唇がそんなに気に入ったんですか。いいですよ。気が済むまで吸ってください」

ぢゅるぢゅる♡ちゅぷ♡ちゅぱちゅぱ♡

ちゅっ♡ぢゅるううっ♡♡

夢中でシリルさんの唇に吸い付く。

キスしている間、優しく髪や首すじを撫でられて。それだけなのに、うっとりするくらい心地良い。

「はあ……っ」

長い長いキスのあと、ようやく唇を離すと、つうつと唾液が糸のよう垂れる。

ふとシリルさんの顔を見ると――

「……………!?」

（シリルさんの頭に……真っ黒でヤギみたいな角が……!?）

思わず、角に釘付けになってしまう。

よく見たら、耳の先っぽが尖ってるし。

（疲れすぎて、幻覚見ちゃってるのかな……?）

私の視線に気づいたシリルさんが、照れくさそうに頭を撫でた。

「ああ、すみません。申し遅れておりましたが、私淫魔です」

「い……淫魔？」

「はい。人間の女性の体液を主食としております。先ほどあなたの唾液を摂取したので、本来の姿が現れてしまったようです」

シリルさんはお尻に生えている、黒い尻尾をぴん、と立ててみせた。

こんなことありえるんだろうか？

呆然としている私へ、シリルさんが微笑みかける。

「信じられないかと思いますが、事実なのです。代わりに、淫魔の体液を人間の女性が摂取すると、気力体力が回復し、途方もない快感を得ることができます。まるで栄養ドリンクのようでしょう？ ふふっ」

そういえば、確かにシリルさんとキスした時、ありえない位気持ちよかった。

それに……さつきより体調がいい気がする。

彼の唾液を摂取した効果ならば、確かに説明がつく。

「この店に引き寄せられるのは、あなたのように人生に絶望している女性ばかりなのですが……店の前で倒れられたのは初めてですよ」

「す、すみません……あの、でも、どうしてそんな人間ばかりを……？ 元氣にあふれている人の方が、美味しい生気をもらえそうなの
に」

シリルさんは天井をにらんでうーん、と小さくうなづいた。

「そうですねえ。好みの問題、でしょうか」

「……好み……？」

「絶望しきっている方の体液は、確かに無味無臭であまり美味しいものではありません。ですが――」

シリルさんが私の頬を手で包み込み、囁く。

「快楽を与えた後の彼女たちのそれはとても芳醇で、上質なワインのようにコクを増すんですよ……♡」

「……っ」

再び、彼の唇が私の唇を捉える。

拒絶する間も与えられなかった。というか、拒絶なんてとても出来ない。だって、またあの蕩けるような快感を味わいたいと思っただけから。

ちゅ、ちゅっ♡と唇全体を揉むように食み、れろり♡と長い舌を差しこんで歯列を舐め回す。

「っっ♡」

さつきよりも強く甘い痺れが、口から流れ込んできた。

（何これっ……♡ お腹っ、ぞくぞくっして……♡ 熱い……っ♡）

「ふふ、あなたの唾液……ちゅっ♡さつきよりも甘くて良い香りになってきましたね……♡ さあ、もっと気持ち良くなって、私に美味しい体液を飲ませてください……♡」

ぢゆるう♡ぢゆるるうう♡

舌を根元から強く吸い上げられ、太ももをそつとさすられる。

「くっ♡んっ♡んううくっ♡♡」

たったそれだけで頭の裏がビリビリ痺れて、腰砕けになりそうだ。ちゆくちゆく♡と頬裏の粘膜を揉むように、舌がうごめく。

(口の中っ♡もみもみされてるっ♡)

まるで口がおまんこになったみたいに、とろとろに蕩けてゆく。

頭の中にピンクのモヤがあったみたいで、ぼうつとする。

身体に力が入らない。

といつても、倒れる前とは違って、全身が熱く火照って心地よさで満たされていて。

緩みきった身体を全てシリルさんに委ねたくなる。

「口まんこよしよしされて、気持ち良かったでしょう？ これからもつと、良いことをしてあげますから……♡つらいことも苦しいことも、全部忘れてください」

シリルさんの言葉が耳に流し込まれて、頭の中をふわふわと漂う。何も考えたくない。

つらい現実なんて、全部忘れたい。

じゅるう♡とぷっ……♡

蜜餞のように甘い唾液をたっぷり♡纏わせた長い舌が、喉を直接撫でてくる。

苦しいはずなのに、喉の粘膜は嬉しそうにヒクついていて。お尻のあたりがむずむずしてくる。

「さあ……♡たっぷり飲んでくださいね……♡」

たたり、と舌から滴る唾液を流し込まれて、こくこくと飲み干す。
とろりとした液体が喉を流れ落ちると、ぼうつとお腹が温かくなつて、じわり、と股間から蜜が染み出てくる。

「ふふ、上手に飲めましたね。ほら……こっちへおいで」

シリルさんが両手を広げる。私は言われるがままに、彼の膝の上へ乗り、ぎゅつと首にしがみついた。

ちゅ……♡ちゅ……♡

ついばむようなキスを繰り返しながら、シリルさんがささす♡と私のふとももをさする。

それだけでもう、達してしまいそうに心地良い。

「……っは……♡ もつと……♡ もつとしてください……♡ いっぱい、触って……っ」

「いいですよ。あなたの望むままに……」

シリルさんの唇が私の顎を捉え、かぷりと甘噛みする。

「ふぁ……♡」

れろ……♡れろろお♡ぬろお♡

顎から首筋にかけて舐め上げられ、ちゅう、と強く首の横へ吸い付かれる。

まるでシリルさんに食べられているみたい。

（このまま……全部食べられちゃいたい♡）

彼と溶け合って、ひとつになれたらいいのに。

ちゅ……♡ちゅば……♡ちゅうう……♡

シリルさんの唇は胸元へ這い、ブラウスごと強く乳房へ吸い付いてくる。

「……っあ♡服の上から吸う、なんてえ……っ♡」

「ふふ、背徳的で良いでしょう？ ほら、もうブラが透けてきた……えっちですな……♡」

ぢゅる……♡ぢゅぷ……♡

布越しに齒を立てられ、ジンジンとおっぱいの内側が熱くなってくる。

まるで、ブラウスとブラを貫通して直接吸い付かれているみたいなの錯覚に囚われるほど、心地良くて。

（こんなの……直に吸われたら、どうなっちゃうの……♡♡）

唾液でぐっしより♡濡れたブラウスが肌に張りつき、ベージュのブラがくつきり♡と形を現している。

肌からも体液を吸収しているのか、身体がジンジンと熱い。

「ほら、乳首もぷっくり♡浮き上がって……期待してるんですか？」
シリルさんがこりっ♡と乳首を摘まんで軽く引っ張る。

「ひゅん……♡ひ、引っ張らないでえ……♡」

びんびん♡に勃った乳首を引っ張って、ぷるぷると揺らされる。
それだけでもう、軽くイっつてしまいそうなくらいに気持ちいい。

「ふふ、可愛い声で鳴くんですね。もつと聞きたくなってしまう。
さあ……次はあなたの全てを、私に見せてください」

ぷち、ぷち、とブラウスのボタンを外し、背中に手を回してブラの
ホックを外される。

ぷるんっ♡と自由になったおっぱいが、シリルさんの目の前へ飛び
出す。

「乳首が吸い付いてください♡と言わんばかりにぷりっぷりですね。」

美味しそうに熟れている」

れろ……♡ちゅ、れろれろお♡

シリルさんの舌が乳頭を押し込むように突き、れろり♡と乳首の根元を舐め回す。

片方の乳房は親指と人差し指で挟まれてくにくに♡と摘ままれ、根元からくっ♡と倒されたり、かと思うとぎゅう♡と引つ張り上げられたりと、絶え間なく愉悦を与えてくる。

ただおっぱいを舐めたり捏ねられたりしているだけなのに。淫らな熱があちらこちらで弾けて、勝手におまんこがどろどろになっってしまう。

「……っ♡はっ♡あっ♡乳首っ……♡きもちい……♡うそお♡なんで、こんなっ……♡」

「ふふ、乳首イジられただけでびくびく♡腰が震えていますね。淫魔の体液は、それはもう極上の媚薬ですからね……♡もう人間の男では満足出来なくなるくらいエクスタシーを感じることが出来るんですよ♡」

くりくり♡きゅう♡

指でぐにと乳頭を押し込まれ、ぐるぐると円を描くように捏ねられる。

ぱちぱちっ♡と目の前で小さく火花が弾けて、あっという間に達してしまった。

「はっひ♡ おっ♡ うあ♡ あああ♡ イクっ♡ イクっ♡ イクうう♡♡♡」

仰け反って悶絶する私の股間から、溢れた蜜がぴゅっ♡と飛びだし

てショーツのクロッチをびしょびしょ♡に濡らす。

「もうおまんこぐちょぬれ♡ですね。あれだけイジられたら当然です
が……♡」

とん♡とん♡

くつきり♡ショーツから浮き上がっているクリトリスを狙い撃ちして、あやすように指で叩かれる。

タッチはさほど強くない。むしろ、触れるか触れていないかくらいの柔らかさだ。

なのに――

「っ♡ あっ♡ ひっ♡ おうっ♡ おおおうっ♡」

ぴゅ♡ぴゅ♡と淫裂から溢れた蜜が吹き出し、ショーツはおもらししたみたいにくっしより♡だ。

(すぐっ♡またイってるっ♡なにこれえ♡こんなの初めてっ♡♡)

シリルさんの膝の上でM字開脚して、お尻をふるふる震わせてみっ
ともない声をあげて。

付き合っていた彼氏とのセックスでいったことなんてなかったのに。

(クリイキって、こんな気持ち良かったなんて……っ♡)

「クリがふっくら♡大きくなってきましたね♡いいいいこ♡よしよし♡」

すり♡すり♡と指腹が淫豆の両脇をさすり、軽くくにつ♡と押し潰す。

「んおっ♡♡だめっ♡それだめえ♡♡」

「ふふ♡可愛い声で鳴いてくれますね。いいいいこ♡」

くに♡くに♡と布越しに肉芽をこねまわされる。

ぐぐつと持ち上がった腰がへこついて、自分から愛撫を求めているかのよう。

（こんなっ♡おまんこ甘やかすみたい♡くりくりされてっ♡じわじわ追い詰められちゃうっ♡）

「ふふ、またイキそうですか？ いいんですよ♡好きなだけイったださい♡イケばイクほど、あなたは癒されていくのですから……♡」

ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡

シリルさんがくつきり♡と盛り上がった肉芽の根元を指で挟んで、優しく擦り上げる。

ぷちゅっ♡とはちきれそうなほどに膨らんだ淫豆いっぱいに快感の粒が溜まって、今にも弾け飛びそう。

「っ♡あ♡またイグッ♡いっっちゃうからっ♡っ♡ああああっ♡」

びくびくっ♡と腰をカクつかせて、あつという間に絶頂を迎えてしまふ。

ふじゅっ♡

許容量を超えたショーツからおまんこ汁が漏れて、ポタポタと雫をソファ―ベッドに垂らす。

「ふふ♡だいぶ熟成が進んだようですね♡そろそろ、私も食事をいただくしましょう」

シリルさんは私をソファ―ベッドにそつと寝かせるとするりとショーツを脱がし、股間に頭を潜らせた。

れろおゝ♡ぬろろろろっ♡ずるう♡にゅぶぶううう♡♡♡♡♡

「ひあ……っ♡ん おっ♡おほおおおゝ♡♡♡♡」

一瞬何が起こったのか分からなかった。

胎内をずるり、と長い蛇が這うような感覚。

続いて、ぐにゆり♡と中でうねり、お腹の中のたうちまわる。

(これえ……♡おまんこの奥までっ♡舌っ♡ぐっぽり入ってる♡)

シリルさんの長い舌が、シワのひとつひとつまで丹念に伸ばし、ずろろっ♡と膣襞から滴る愛液を丹念に舐め取る。

膣筒が裏返しそうなほど強く吸い付かれると、頭の中でバチッと火花が弾けて、勝手に腰がビクビク♡と何度も跳ね上がってしまう。

「ひう♡ おっ♡んお♡はっ……ん♡う♡く♡う♡ん♡♡」

口の中を愛撫された時と同じ——いや、そんなの比べものにならない。

膣粘膜をぶちゅぶちゅ♡とねぶりまわされる感覚は、身体の芯を揺さぶられるような強烈な快感を胎内に流し込んでくる。

「はあ……っ♡なんと濃厚で甘酸っぱい愛液なんでしょう……♡こんなに美味しいラブジュースをいただくのは久しぶりです……♡ぢゆる♡ぢゆるうう♡」

シリルさんはうつとりとして私のお尻を持ち上げ、お尻に垂れた愛液まで啜りあげる。

「もつ♡もつ♡とコクを増したラブジュースをください♡さあ♡さあっ♡」

こりゅこりゅ♡くりっ♡ぐににっ♡

さつき下着の上から存分に舐められた淫豆を、シリルさんが指で摘み上げる。

「ひっ♡うっ♡ んううう♡あっ♡ おおっ♡クリっ♡一緒にいじっぢやらめえええ♡♡」

おまんこの底がぎゅううううと緊縮してぺたりとお腹とくつきそうだ。

腰をよじってシリルさんの指から逃れようとするけれど、がっちり
と片手で掴まれて動きを封じられてしまった。

「ダメですよ♡逃げちゃ……♡これからもつとめスイキして、
極上のラブジュースへと熟成させないといけないんですから……♡」

「ひっぐ♡やっ♡ おっ♡ あっ♡ ああああ……♡」

「ほら♡分かりますか？ G スポットがぷっくり♡膨らんでいるのを
……♡私にココが性感帯だと教えてくださってるんですね♡ふふ、素
直で可愛いおまんこだ……♡」

裏筋をぞりりりっ♡と指で擦り上げられながら、舌でお腹の裏をぐ
にぐに♡と押し上げられる。

まるでGスポットをもみもみ♡されているみたい。

「ふつくらして、柔らかくて……ふふっ♡もっといっぱいもみもみ♡してあげましょう」

長い舌がぐねぐねうねって、ぷっくり♡膨らんだ肉天井を器用に揉みしだく。

「ゝあっひ♡ うあ♡ あっ♡ ああ♡♡」

カエルみたいにぱっくり♡開いた足が何度もびくん♡びくん♡と跳ね上がる。

「ほら、またクリがぷくぷく♡に勃起してきましたよ。今度はちっちゃなちんぽみたいになるまで、シコシコ♡して差し上げますからね」

